

獣医臨床における「イペットS」 (タヒボ原末含有)の効果・2

藤田道郎¹⁾、島倉秀勝¹⁾、弥吉直子¹⁾、谷口明子²⁾
長谷川大輔¹⁾、織間博光¹⁾
大川 博³⁾、安達 実⁴⁾、畠中平八⁴⁾

1): 日本獣医生命科学大学、2): ヤマザキ動物看護短期大学
3): (株)スケアクロウ、4): (株)ウェルネス・アドバンス

イペットS(タヒボ含有)

(1錠150mg、丸薬型、直径5mm、高さ3mm)

原料: 南米ブラジルに生息するノウゼンカズラ科の
タバブイア・アベラネダエという樹木の外皮と木質部に
挟まれた7mm程度の内部樹皮。

作用

- ・発ガンプロモーション阻害作用 (*in vitro*)
(Ueda,S., et al., *Phytochemistry* 36:323-325,1994)
- ・腫瘍細胞への直接(アポトーシス誘導)作用
と血管新生抑制作用、加えて正常末梢リンパ
球にはそれら両作用は見られなかった。 (*in vitro*)
(海老名ら, *Biotherapy* 12:495-500,1998)
- ・貪食機能を有する好中球、マクロファージの抗酸化作用を
低下させ、リンパ球の細胞性免疫機能を亢進する働きがあり、
両作用により疾病の治癒を早める可能性有り。 (*in vivo*)
(津曲ら, *小動物臨床* 26:375-380,2007)



腫瘍細胞に対して直接的効果と間接的効果を有する!!

イペットS(タヒボ含有)

(1錠150mg、丸薬型、直径5mm、高さ3mm)



使用経験

・Bacowsky,Hによるin vivo検討

- ①病状および病期が異なる癌患者12例を対象とした
タヒボエキス(QOL)に対する影響(摂取30日目、120日目に評価)

→身体的および精神的状態が改善

(J.New Rem. & Clin. 55:1772-1783 2006)

- ②手術不能な高度進行肝肉腫患者における
タヒボ30gエキスの連日経口摂取(摂取前、30、60、90、120、150、180日目に評価)

→腫瘍マーカーの高値が低下

(J.New Rem. & Clin. 55:1784-1792 2006)

- ③転移性進行気管支癌患者において化学療法を併用した
タヒボ30gエキスの連日経口摂取(摂取前、30、60、90、120、150、180日目に評価)

→腫瘍マーカーの高値が低下

(J.New Rem. & Clin. 55:1793-1801 2006)

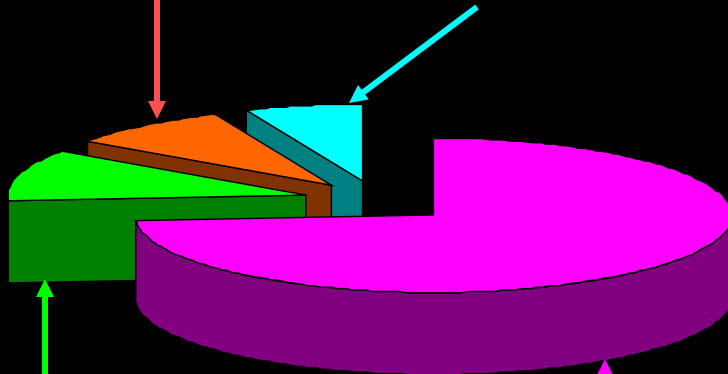
第29回動物臨床医学会での報告・1



供試動物: 日本獣医生命科学大学において病理組織学的
あるいはMR画像的に腫瘍と診断された犬51頭

QOLの評価と抗腫瘍効果

再発または再増大(-) 再発または再増大(+)
転移(+): 4頭(8.7%) 転移(+): 3頭(6.5%)



QOLの評価

再発または再増大(-)、転移(-)の34頭
は良好。
残りの12頭は末期に至るまでは良好

再発または再増大(+)
転移(-): 5頭(10.9%)

再発または再増大(-)
転移(-): 34頭(73.9%)



検討・1 小 括

- ・嗜好性は問題ない。
- ・血液学的には問題ない
- ・QOLについては維持が期待できる

第29回動物臨床医学会での報告・2



各開業動物病院での使用例についての報告・まとめ

使用施設病院および使用症例数

10病院19症例

組織学的または挙動的に悪性腫瘍－15例

良性腫瘍－1例

悪性か良性か不明な腫瘍－3例

他の積極的治療を行わず、本食品のみ5例

→明らかな抗腫瘍効果：5例

手術後、本食品を服用9例

→再発、再増大あるいは転移(－)：8例

積極的治療との併用で本食品を服用1例

→再発、再増大あるいは転移(－)：1例

QOLが改善あるいは良好に維持：14例(/15例中)



検討・2 小 括

- ・嗜好性は問題ない。
- ・QOLについては維持あるいは改善が期待できる。
- ・抗腫瘍効果についても期待できる。

問題点

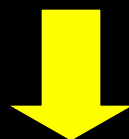


検討1: 日本獣医生命科学大学において病理組織学的
あるいはMR画像的に腫瘍と診断された犬51頭



抗腫瘍効果は他の積極的治療との
併用なので評価は困難

検討2: 各開業動物病院での使用例についての報告



投与開始時期あるいは他の治療法との
併用が不明確な症例もあり、かつ症例数も少ない。

今回の目的



全国の28の開業動物病院にイペットS
を使用してもらい、その効果について
アンケートによる抗腫瘍効果あるいは
原疾患に対する効果および生活の質
(QOL)の効果判定を実施。



供試動物: 病理組織学的、細胞診学的あるいは肉眼的、
挙動的に腫瘍または腫瘍と診断された症例83頭
FeLV感染症と診断された1頭

犬77頭

(年齢—2~16.2歳、平均10.9歳、中央9.9歳)

(体重—2.65~35kg、平均11.15kg、中央7.85kg)

猫7頭

(年齢—2~14歳、平均8.4歳、中央9.0歳)

(体重—3.0~7.2kg、平均4.32kg、中央3.8kg)

悪性腫瘍と確定診断:59頭(犬53頭、猫5頭)

給与量: 体重5kg未満—1錠、5~10kg未満—2錠

10~20kg未満—4錠、20~30kg未満—6錠、30kg以上—8錠

投与回数: 1日1~2回

他の治療: 制限無し

検討項目: 嗜好性、抗腫瘍効果、原疾患に対する効果、QOLの評価

結果



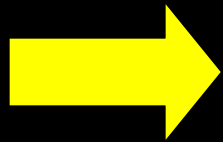
嗜好性

食欲不振で給餌がほとんど出来なかった
1頭を除く83頭において服用を嫌がることは
見られなかった。

結果



服用期間中の腫瘍を含む原疾患の 動向およびQOLの評価



イペットS服用期間が明確でないものや効果判定の
明確な記載がないものまたは服用期間が30日未満を
除いた38頭(犬34頭、猫4頭)で評価。

このうち、悪性腫瘍は33頭、良性腫瘍4頭、FeLV感染症1頭

結果



服用期間: 30～300日(平均111.1日、中央100日)

分類

- (1) 術後あるいは化学療法休薬後にイペットSのみを服用した群
- (2) 上記の治療を一切行わず、イペットSのみを服用、または一定期間併用後に単独で服用した群
- (3) 原疾患に対する化学療法と併用してイペットSを服用した群

結果



(1) 術後あるいは化学療法休薬後にイペットS
のみを服用した群

➡ 13頭

抗腫瘍効果判定

腫瘍の再発または再燃などが見られず経過良好 : 10頭
腫瘍の増大 : 3頭

QOLの評価

改善 : 1頭
安定 : 11頭
悪化 : 1頭

結果



(3) 原疾患に対する化学療法と併用してイペットS
を服用した群

➡ 21頭

抗腫瘍効果判定

改善	: 7頭
経過良好	: 6頭
悪化	: 5頭

FeLV症状の改善	: 1頭
-----------	------

QOLの評価

改善	: 10頭
経過良好	: 8頭
悪化	: 3頭

症 例 (FeLV感染症)

雑種猫、去勢済雄、4歳、体重4.5kg

外傷治癒遅延、全身性リンパ節炎



併用薬剤: ビタミン剤、コンベニア、ビムロン、プレドニゾロンなど

服用期間: 約6カ月

イペットS服用後の感想あるいはデータ

服用前は発熱、貧血、白血球および血小板減少状態であったが、服用後に貧血改善、血小板数も増加。

リンパ節腫大は続いているが、全身状態は良好に推移。

6カ月頃より、徐々に発熱、嘔吐、下痢、全身状態悪化。

プレドニゾロンは頓服的に使用とのこと。

イペットS単独でも状態が安定期見られていた時期があったとのこと。

結果



(2) 上記の治療を一切行わず、イペットSのみを服用、
または一定期間併用後に単独で服用した群

➡ 4頭

抗腫瘍効果判定

腫瘍が明らかに消失あるいは縮小した : 2頭
腫瘍の増大 : 2頭

QOLの評価

改善 : 3頭
悪化 : 1頭

症 例 (乳腺腫)



ゴールデン・レトリバー、14歳、メス、体重28.3kg。

2008年1月5日に右最下部乳腺部の腫瘍切除。
その後、左側の乳腺部にしこりが出来て徐々に腫大。
同年9月29日老齢のため、飼い主が手術を希望しない
ため、飼い主の希望でイペットSの処方を開始。

服用を開始してから左側乳腺部のしこりが
徐々に縮小。
また元気食欲はもともとあったが、服用後、
さらに良くなった。

初診時の腫瘍サイズ
3 × 8cm

イペットS服用開始

初診時から
16日目 : 3 × 6cm



初診時から30日目 : 2.6 × 5cm



初診時から
43日目 : 2.5 × 5.3cm



症 例 (移行上皮癌)



雑種犬、4歳、避妊済メス、体重13.7kg。

血尿、排尿状態が悪いとのことで種々の精査を実施したところ、超音波検査にて膀胱内に腫瘍が見られ、某大学において移行上皮癌と組織診断。

治療経過

確定診断後、**バキソ**を使用するも下痢が見られ、中止。

その後、**プレビコックス**に変更。

腫瘍の大きさに変化が見られないため、確定診断から約2カ月後にイペットSの併用開始。

併用開始約1カ月後、超音波検査にて腫瘍消失。

その後イペットS単独で約40日経過するも腫瘍は消失継続。

考 察



(2) 手術や抗ガン剤などの治療を一切行わず、または
初期の一定期間のみ併用後単独で服用した群

抗腫瘍効果判定(4頭)

腫瘍が明らかに消失あるいは縮小した	: 2頭
腫瘍の増大	: 2頭

(1)、(2)および(3)全体において

QOLの評価

改善	: 14頭(36.8%)
安定	: 19頭(50%)

抗腫瘍効果については症例数は少ないが、有用性の可能性
QOLについてはかなり有用性

課題



○各項目をスコア化してより客観的に評価する。

- ・使用理由
- ・腫瘍の臨床ステージ分類
- etc

○イペットS単独症例の増加

今回、ご協力いただいた動物病院一覧(順不同)



D&C獣医科クリニック(茨城県牛久市)
あみ動物病院(東京都世田谷区)
あべ動物病院(宮城県石巻市)
福生どうぶつ愛護病院(東京都福生市)
西岡橋どうぶつ病院(兵庫県神戸市)
今田獣医科病院(大阪府交野市)
吉村動物病院(兵庫県小野市)
アーク動物病院(東京都大田区)
久松動物病院(神奈川県横浜市)
空港通りの動物病院(新潟県新潟市)
三軒茶屋アニマルクリニック(東京都世田谷区)
あおのペットクリニック(神奈川県小田原市)

につぱし動物病院(東京都立川市)
浜田獣医科病院(島根県浜田市)
ななお動物病院(石川県七尾市)
モーリス動物病院(東京都東村山市)
ハート動物クリニック(愛知県豊橋市)
牛浜ペットクリニック(東京都福生市)
MARUCO動物病院(北海道札幌市)
椎動物病院(宮崎県西都市)
芝動物病院(京都府京都市)
小沢動物病院(静岡県静岡市)

深謝致します。